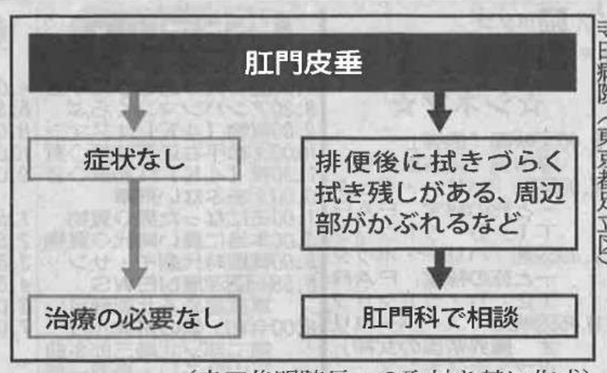
安易な手術に待った

肛門皮垂

いぼ痔（じ、痔核）や切れ痔（裂肛）などの名残として、腫れが引いた後に皮膚の余剰部分がたるんでしわになる「肛門皮垂（ひすい）」。スキンタグとも呼ばれ、若い女性などがその見た目を気にして手術を求めるケースがあるという。寺田病院（東京都足立区）の寺田俊明院長は「安易に治療をするべきではありません」と警鐘を鳴らしている。



（寺田俊明院長への取材を基に作成）

病気ではない

便秘や出産でいきんだり、下痢を繰り返したりすることで肛門の静脈に強い負荷がかかるといぼ痔や切れ痔になりやすい。

「いぼ痔の場合、肛門と直腸の境目にある歯状線（しじょうせん）より直腸側にできるのが内痔核、肛門側にできるのが外痔核。歯状線より直腸側は知覚神経がなく痛みを感じにくい一方、肛門側は痛みを感じやすいのが特徴です」。いぼ痔による肛門皮垂は、外痔核の腫れが引いた後、その部分の皮膚がたるんだ状態を指す。急激なダイエットでおなかや太もも周りの皮膚がたるんだ状態をイメージすると分かりやすい。

「肛門皮垂自体は病気ではありません。人は生まれてからずっと排便を繰り返しますから、症状の有無にかかわらずほとんどの人は痔核を持っており、目立った症状さえなければ特に治療をする必要はないのです」

支障があれば受診

寺田院長は、いぼ痔を氷山に例える。「水面下でできる氷が内痔核、水面に出ている部分が外痔核です。外痔核の名残である皮垂だけを手術で切除しても再び外痔核はできてしまいます。本来なら内痔核そのものを切除する根治手術を行うべきでしょう」

しかし、生活に支障を来すほどの症状があれば話は別だ。皮垂が大きく排便後にお尻が拭きづらかったり拭き残しがあったり、皮垂周辺部がかぶれたりするなら、迷わず肛門科を受診したい。だが、根治手術を行っても、排便をする以上、新たに痔ができてやがて皮垂になる可能性は十分にあるという。

「症状がないケースでは、治療は自由診療で行われます。再び痔になれば、手術を繰り返すことにもなりかねません。赤ちゃんの頃のようなしわや皮垂のない肛門には戻れません。皮垂は生きてきた『年輪』のようなもの。安易に治療を行うことはやめましょう」と、寺田院長は注意を呼び掛けている。（メディカルトリビューン＝時事）

◇　◇

寺田病院の所在地　〒123-0873　東京都足立区扇1の20の12　電話0120（77）0874

Lively life はつらつライフ

健（こう）から福（こう）への架け橋

—61—

矯正歯科治療の適齢期

成長期 歯並び含めた配慮を

成長期のお子さんを連れて矯正歯科治療の初診相談にいらっしゃる方の中には、今のうちにやらないと矯正歯科治療ができなくなってしまうのでは、と心配して来院される方がいらっしゃいます。

結論を述べると、いくつになっても矯正治療は可能と考えて頂いて大丈夫です。近年、成人になってから矯正治療を始められる患者さんが増加傾向にあることもそれを象徴しているエピソードかもしれません。

ただ、乳歯から永久歯へ交換する「混合歯列期」に歯のガタガタが見られたり、前歯部に反対咬合があり、それらが本来有している生理的な永久歯への交換や顎骨の自然成長を阻害しているケースがあります。

「混合歯列期」は乳歯から永久歯への交換がなされるだけでなく、顎顔面部と顎骨の成長が旺盛な時期でもあります。

乳歯は生後だいたい6か月頃から下の前歯から萌出し始め、だいたい2歳6カ月から3歳頃には奥歯まで含めた乳歯列が完成します。

その後しばらくはお口の中で乳歯に大きな変化は見られませんが、顎骨の成長は続いていきます。

6歳、7歳頃、ちょうど小学校に上がる頃に乳歯から永久歯への交換期が始まり、中学校へ上がる12才頃に奥歯まで含めた永久歯列が完成します。

口腔周囲の成長は乳歯の萌出から始まり、交換期を経て永久歯列が完成しますが、併せて顎骨の成長も丁寧に見守ってあげる必要があります。

上顎と下顎の骨格的成長には、口腔内の歯並び状態が顕著に影響するためです。

成長期の口腔内の歯並びに不具合があると、上顎や下顎などの口腔周囲の骨格成長に好ましくない影響を及ぼす場合があり、歯並びだけでなく、顔立ちに関わる骨格にまで影響が及んでしまうケースは少なくありません。

矯正歯科治療により、歯並びだけ動かして改善でき場合もあれば、骨格的要因が関係している場合には外科手術を伴う矯正歯科治療が必要になる場合もあります。

いくつになっても矯正歯科治療は可能と考えて頂いて大丈夫なのですが、骨格へも影響を及ぼす場合があることも知って頂き、そう考えると特に成長期には、歯並びも含めた口内環境への配慮をしてあげたいですね。

（逸見　優＝夢叶え歯科クリニック院長）

＝毎月第4木曜日掲載

ずっと健康、もっと美しく

まれな神経疾患

特徴を解明

世界で100人程度のまれな神経疾患「顔面発症感覚運動ニューロノパチー（FOSMN）」の特徴を明らかにしたと、九州大大学院などの研究グループが発表した。

FOSMNは顔や口の感覚障害から発症し、飲み込みにくい、しゃべりにくいなどの重篤な運動障害が起き、次第に下半身にまで広がる。症状が複雑で認知度が低いため、未診断の患者が潜んでいる可能性がある。

研究グループは、2020年6月～21年9月にFOSMNの患者数や症状に関する全国調査を実施。604施設から回答を得た。

分析の結果、国内の患者数は約36人と推定された。診断済みの21人の多くは刺激に対する目や喉の反応に異常があり、診断につながる症状と考えられた。さらに運動症状が強いと進行が早いことや、発症初期の免疫療法で症状が緩和される可能性があることも分かった。

（メディカルトリビューン＝時事）

不規則な生活影響か

子どもの頭痛

子どもの頭痛には、不規則な食事または夜型の生活、スマートフォンやテレビなどの画面視聴時間の長さが関係する可能性が示されたと、カナダの研究グループが発表した。

研究グループは、カナダの住民健康調査に回答した5～17歳の子ども497万8370人のデータを解析。食事の時間、画面視聴時間、運動、飲酒や喫煙（受動喫煙を含む）などの習慣と、週2回以上の頭痛との関連を調べた。

6・1％が週2回以上の頭痛があると回答。年齢と性別を調整して分析した結果、頭痛リスクには夜型生活、週に21時間以上の画面視聴時間の長さが関係し、12～17歳では、月5回以上の暴飲暴食、喫煙、電子たばこや大麻の使用、飲酒などが関連していた。

一方、規則正しい食生活を送ることは、頭痛リスクの低下と関係していた。運動量との有意な関連は認められなかった。

（メディカルトリビューン＝時事）

化粧取って運動を

乾燥肌の元に

化粧をしたまま運動すると皮膚表面の油分が減り、乾燥につながる可能性が示されたと、米国などの研究グループが発表した。

研究グループは、健康な大学生の男子20人（平均年齢26・3歳）と女子23人（同23・1歳）に、額と頬の片面（右か左）にファンデーションを塗布した状態で20分の歩行運動を行ってもらい、運動前後で左右の皮膚の状態を比較した。

その結果、運動後は塗布の有無にかかわらず、額の皮膚の水分と弾力性が増加した。毛穴の大きさは、塗布していない額では拡大した。塗布した額と頬の毛穴は、塗布しなかった面と比べて小さくなり、表皮の油分が減少した。

研究グループは「ファンデーションで皮膚の水分蒸発が部分的に抑制され、水分が増加した結果となったが、毛穴はふさがれ油分は良好に保たれなかった。乾燥につながる恐れがあり、運動中の化粧は避けた方がよい」と指摘している。（メディカルトリビューン＝時事）

6割超が満足

がん遺伝子パネル検査

がん細胞の遺伝子変化を調べる「がん遺伝子パネル検査」に関するアンケートで、満足度が64・5％に達したと、東京大医学部付属病院などの研究グループが発表した。

同検査は、標準治療がない場合などに、多数のがん遺伝子を一度に調べ、個々の患者に適した治療法を探す目的で行われる。

研究グループは、2021年3月～22年7月に検査の情報源、検査に対する理解度や満足度（10点満点）に関するアンケートを実施。検査を受けた933人（10歳未満～90歳以上）の回答を分析した。

その結果、医療者からの説明で初めて検査について知ったのは84・0％で、説明が分かりやすい（7点以上）としたのは75・2％、新たな治療を始めたのは9・8％だった。

検査のプロセスに対する満足度は高く、64・5％が7点以上をつけ、過半数を占めた。理由としては「がんのリスクについて考えられた」「検査結果を詳しく説明してくれた」などが挙げられた。（メディカルトリビューン＝時事）